

同朋
選書
29

歎異抄に学ぶ
松本梶丸

目次 ● 歎異抄に学ぶ

- 時の手応え 1
- 今、忘失しているもの 5
- 絶対自覚と絶対信頼 9
- 善人とは暗いひと・悪人とは明るいひと 13
- Nさんが聞いた大悲招喚の勅命 17
- 供養をうけねばならぬものは 21
- 今、「如是我聞」のひとなく 25
- 『無碍』は、いわく、生死すなわち涅槃なりと知るなり 29
- ひとえに他力にして自力をはなれたるゆえに 33

『も』の一言が開く世界 37

煩惱の必然的事実 41

煩惱の所為なる身への驚き 45

念仏は法爾自然の道理 49

おもうようにならざることをよろこばん 55

背きつづけるもの 59

念仏すらも自行とする善悪の分別の深さ 63

本願のむねをしる学問とは 67

善悪は宿業 71

宿業と運命 75

米兵を撃たなかったのは 79

『笑うな』 83

業報にさしまかせて 87

罪福信の深さ 91

この身をもつて… 95

弥陀の智慧をたまわりて 99

ただひとたびの回心 103

道理は仏智の不思議 107

学生だつるひと 111

おもいしらせんがために… 115

時の手応え

念仏もうきんとおもいたつこころのおこるとき、すな
わちせつしゆふしや撮取不捨の利益りやくにあずけしめたまふなり。

(『歎異抄』第一章)

現代という時代は、この身を知らされ、この身をいたたく、今という時の手応えを失った時代といえまいか。「自身はこれ現に罪悪生死の凡夫……」と。真宗(真実の教え)に遇うとは、万劫の初事として、この身に、今という時をたまわることである。「歎異抄」第一章のお言葉でいただけば、「念仏もうさんとおもいたつころのおこるとき」である。教えを聞くとは、その、時の連続であり、展開であり、深まりである。時はまた「正信偈」でいただければ「能発一念喜愛心」の一念であろう。

それ真実信樂を案ずるに、信樂に一念あり。「一念」は、これ信樂開發の時剋の極促を顕し、広大難思の慶心を彰すなり。

〔「教行信証」信卷・真宗聖典(三三九頁)〕

と、親鸞聖人は仰せくださる。一念は「時剋の極促」と、「広大難思の慶心」という両義を持つ。これを信相の両義性といわれている。「聞信の一念」という言葉があるが、聞信が成就する場合は、いつもただ今である。

「我われの教え(真宗)には呼びかけがある。なにことにも本当の世界には呼びかけというものがある。この呼びかけに出遇うて、はじめて我われに現在が成り立つ。春になれば、田や畑から呼びかけられる。野に山に花が咲く。呼びかけられると、自分の都合など言っておれぬ。自分の都合を忘れて、むしろ喜んで呼びかけに応ずる。呼びかけがなければ、いつまでも、ああかこうかと思案にくれていなければならぬ」。曾我量深先生の仰せである。真実の教えは必ず仏智というはたらきを具し、呼びかけというはたらきがそなわる。そのはたらきに出遇わなければ、人間は今を生きながら、永遠に今に足をつけることなく生涯が費えていく。このような人生を、空過とも流転ともいうのではあるまいか。

「一念というたら、今のひとおもい。ありやあ」と、いただくときや。いつもただ今やわね。ここで聞いて明日喜ぶがでないがや。聞こえたいっぱいの喜びや、今、ここで聞いて、ああ、まちがいなくそうやったなあ、頭がさがったのが一念やわね」。

なんの肩書きもない田舎のおばあちゃんの言葉である。なんと確かな受けとめではな
いか。

今、忘失しているもの

よきひとのおおせをかぶりて、信ずるほかに別の子細しさい
なきなり。

〔歎異抄〕第二章

「親鸞聖人に自叙伝じじよてんというものがあれば、親鸞におきては、ただ念仏して、弥陀にたすけられまいらすべしと、よきひとのおおせをかぶりて、信ずるほかに別の子細しさいなきなり」の一節であろう」と、おっしゃったのは金子大榮先生かねこたいえいであった。

この『歎異抄』第二章の述懐は、聖人、八十余歳のころと推定されているが、聖人が法然上人に出遇われたのは二十九歳。とすれば、そこには五十年の歳月が流れたことになる。つまり、八十歳を越える年齢になられても、師、法然上人のお言葉に、たえず新たに、「ただ念仏して、弥陀にたすけられまいらすべし」(ただ、ナムアマミダブツと、呼びかけひとつを聞くことをとおして、真実の自己に目覚めしめられていけよ)との仰せをかぶりつづけていかれたお姿がいただけるのである。かぶるとは蒙こむる、身に受ける、信受するということであろう。よきひとの仰せは、この身をはずしてはたらく場所はない。仰せと、この身が感応かんのうたう道交するのである。この、「よきひとのおおせをかぶる」ということこそ、現在の宗門が忘失していることではあるまいか。この

ことをはずせば、いかに正論であつても、それは自我のうえに構築こうちくされた他者批判にすぎないのではないだろうか。

よきひとを忘れるとき、よきひとの仰せを忘れるとき、覚えず知らずして、我われは師の位に立っている。「よきひととは、私たちの先を歩んでくださって、しかも、私たちよりはるかに姿勢の低いひとである」と、教えられたことがある。親鸞聖人にふれ、親鸞聖人を語りつつ、我らの姿勢の何と傲慢ごうまんなことであろう。「自信のないものは傲慢である。自信のあるものは謙虚けんきょである」。曾我先生の仰せである。むろん、自信とは一般的にいう自信ではない。「自信教人信じしんきょうにんしん」の自信である。「自らを信ずる」とは、煩惱成就のこの身に出遇うということ。謙虚は人間の努力でなせることではない。仏智にたち帰ったとき、はからずも、この身を知らされ、この身を信ぜしめられたときに誕生する世界である。

「仏法さまでウラ(自分)見せてもらつと、ひとさまのこといとうれん」。二十年も前